



2024年度 第2回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2025年1月～6月)のポイント

海況

黒潮はA型^(※1)基調で推移する。

沿岸水温は、潮岬以西は「平年並」^(※2)～「高め」^(※2)、熊野灘～遠州灘～相模湾は「平年並」～「高め」で暖水波及時に「極めて高め」^(※2)、伊豆諸島海域は「やや高め」^(※2)～「極めて高め」で八丈島周辺では一時的に「低め」^(※2)～「平年並」、房総～常磐南部海域は「平年並」～「高め」で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

A型：流路南端が北緯32度以南

※2 平年並＝平年値±0.5℃程度、高め・低め＝平年値±1.5℃程度、やや高め＝平年値+1.0℃程度、極めて高め＝平年値+2.5℃以上。ただし、鹿島灘～常磐南部海域の基準は次頁末尾を参照のこと。

漁況(来遊量予測)

マイワシ

房総以北では前年を下回り、相模湾以西では前年並～上回る海域が多い。

カタクチイワシ

海域によって異なるが、全体として前年を上回る。

ウルメイワシ

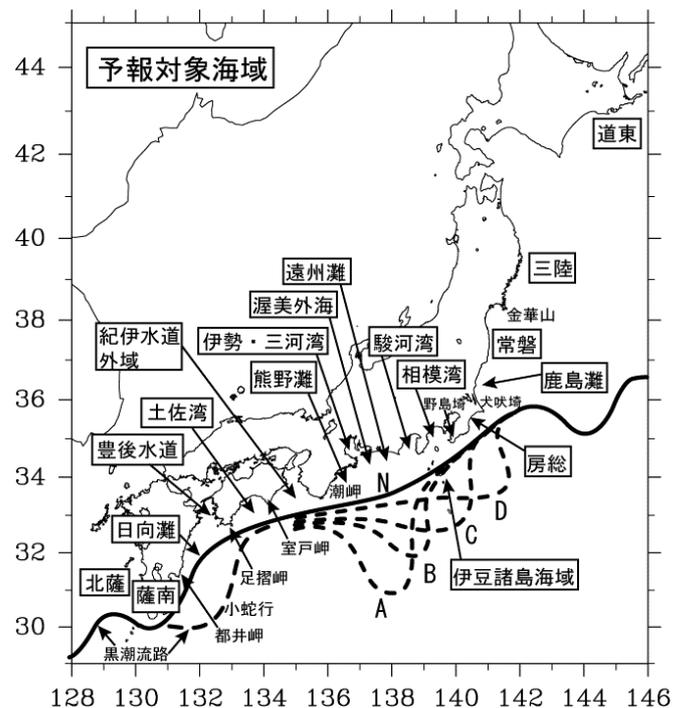
豊後水道以西では前年並～下回り、宿毛湾・土佐湾以東では前年並～上回る。

マアジ

海域によって異なるが、全体として前年並。

マサバ・ゴマサバ

マサバは犬吠埼以北のまき網では極めて低調であった前年を上回るが、その他の海域では前年並～下回る。ゴマサバは引き続き低水準。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構
担当

漁況：浮魚資源部(横浜) 大島、由上、上村、井元、渡部、日野、木下

海況：海洋環境部(横浜) 亀田、安倍

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2025年1月～6月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、3月までは概ね接岸傾向で、その後は離岸傾向で推移する。
- ・足摺岬～室戸岬沖では、離岸傾向で推移するものの、一時的に接岸傾向となることがある。
- ・潮岬沖では、離岸傾向で推移する。

◎潮岬以東

- ・大蛇行が継続し、A型基調で推移する。
- ・蛇行北上部は概ね伊豆諸島海域の西側に位置し、熊野灘～遠州灘に近づくことがある。
- ・犬吠埼沖では、沿岸の冷水の分布に伴い離岸することがある。

(2) 薩南～房総海域

- ・潮岬以西は、一時的に黒潮系水が波及する。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、黒潮の接近や黒潮系水の波及に伴い暖水に覆われる。
- ・伊豆諸島海域は、概ね暖水に覆われる。
- ・房総沖は、黒潮からの暖水に覆われやすい。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・断続的に黒潮による暖水が波及する。

(4) 沿岸水温

- ・薩南～室戸岬は、「平年並」～「高め」で推移する。
- ・紀伊水道外域では、「低め」～「平年並」で推移し、暖水波及時には「平年並」～「高め」となることがある。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、「平年並」～「高め」で推移し、暖水波及時には「極めて高め」となることがある。
- ・伊豆諸島海域は、「やや高め」～「極めて高め」で推移するが、八丈島周辺では一時的に「低め」～「平年並」となることがある。
- ・房総海域～常磐南部海域は、「平年並」～「高め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上
（鹿島灘～常磐南部海域では、平年並＝平年値±1.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.6～3.9℃程度、
（高め、低め）＝平年値±4.0～6.0℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±6.1℃以上）

経過（2024年7月～2024年12月）（注：経過は図2を参照のこと）

(1) 黒潮

- ・ A型流路の大蛇行が継続した。
- ・ 8月中旬～下旬にかけて、九州南東で小蛇行が発生した。
- ・ 8月中旬～9月上旬にかけて、蛇行北上部がS字状となった。
- ・ 9月中旬～下旬にかけて、蛇行北上部が一時的に八丈島付近を通過した。

(2) 薩南～房総海域

◎薩南海域

- ・ 黒潮北縁は、7月は「離岸」、8～9月は「接岸」、10月は「平均的な位置」、11月は「接岸」で推移した。

◎潮岬以西

- ・ 都井岬沖では、期間を通じて離岸傾向で推移した。
- ・ 足摺岬沖では、7～8月は「接岸」～「かなり離岸」、9月上旬は「かなり離岸」～「著しく離岸」、9月中旬～11月下旬は「接岸」～「やや離岸」で推移した。
- ・ 室戸岬沖では、7～8月上旬は「やや離岸」、その後は「やや離岸」～「著しく離岸」で推移した。

◎潮岬以東

- ・ 遠州灘～熊野灘では、断続的に暖水が波及した。
- ・ 駿河湾～相模湾では、断続的に暖水が波及した。
- ・ 黒潮は9月中旬～下旬を除いて三宅島～御蔵島付近を北東～東向きに流れた。
- ・ 野島埼沖では、黒潮は接岸傾向で推移した。
- ・ 犬吠埼沖では、黒潮は7月下旬～8月中旬に一時的に離岸した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 黒潮系暖水の影響が断続的にみられた。

現況 (2024年12月19日現在)

(1) 黒潮

- ・ A型流路であり、大蛇行が継続している。
- ・ 遠州灘沖で 30.5°N 付近まで南下した後、石廊崎沖を北上し、三宅島付近を北東へ流れている。

(2) 薩南～房総海域

◎潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬沖で「接岸」している。
- ・ 黒潮は、足摺岬沖で「やや離岸」している。
- ・ 黒潮は、室戸岬～潮岬沖で「著しく離岸」している。

◎潮岬以東

- ・ 熊野灘～遠州灘沖に、黒潮系暖水がみられる。
- ・ 伊豆諸島海域は、暖水に覆われている。
- ・ 房総沖で「接岸」している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 黒潮系暖水の影響がみられる。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

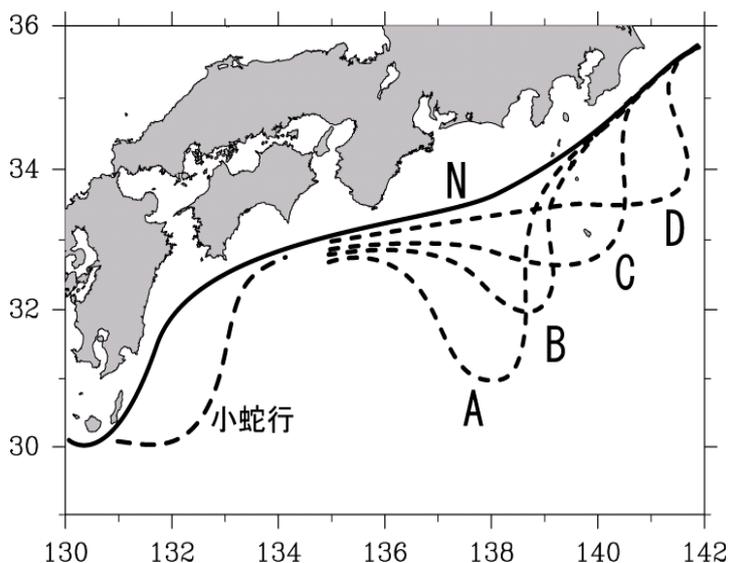


図1 黒潮流型の分類

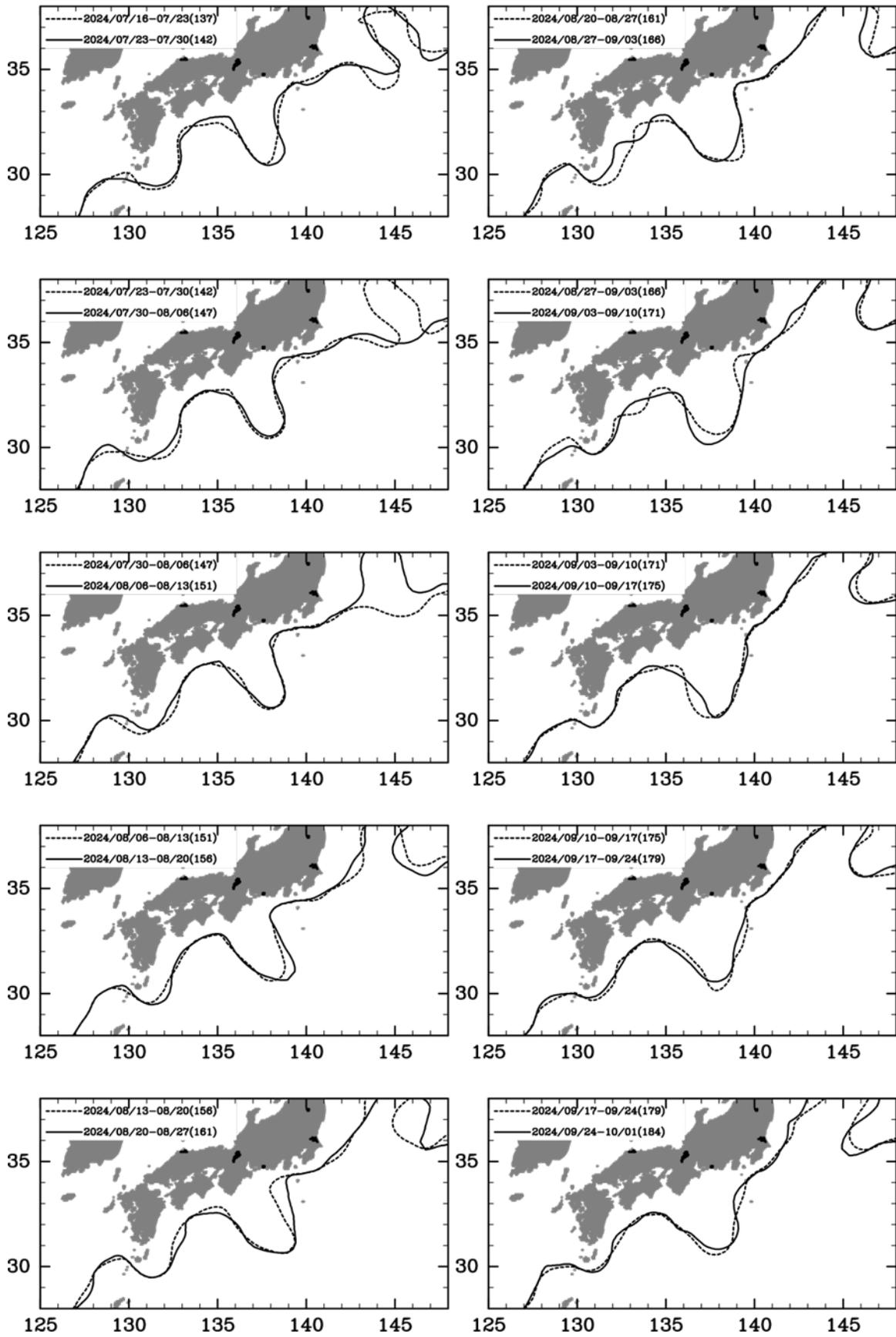


図2 黒潮流軸のパターン

(2024年7月~2024年10月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

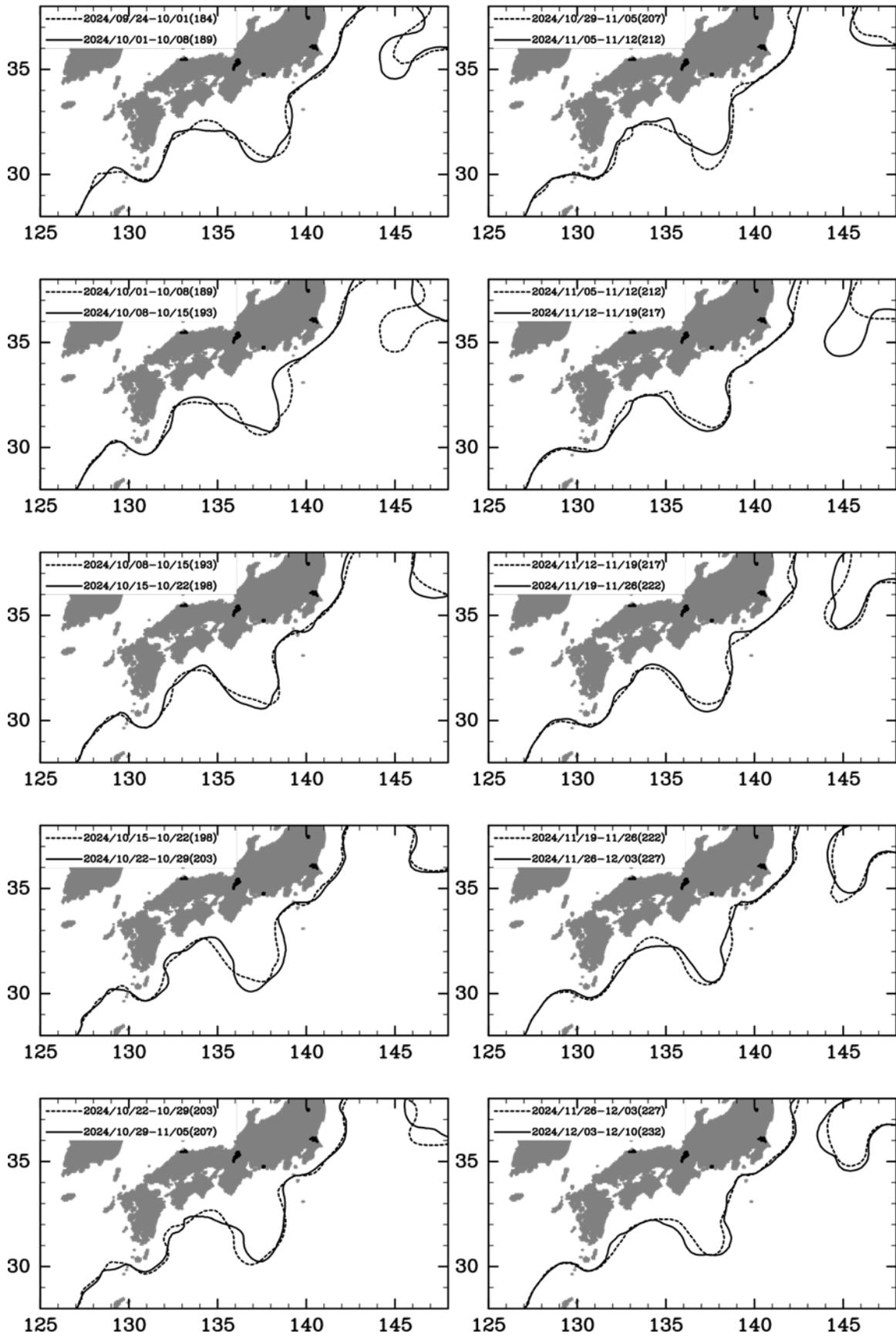


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2024年10月~2024年12月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し (2025年1月～6月)

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚(2025年級群)、1歳魚(2024年級群)、2歳魚(2023年級群)、3歳魚(2022年級群)、4歳(2021年級群)以上。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘(まき網、定置網)

(1) 来遊量：北薩～薩南では前年並。日向灘では前年を上回る。豊後水道南部西側では前年並。豊後水道中南部東側では前年を上回る。宿毛湾、土佐湾では前年並。紀伊水道外域西部では前年を上回る。紀伊水道外域では前年並。熊野灘では低水準。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：北薩～豊後水道南部西側では、期前半は15cm～20cm前後(1歳以上)、期後半は7cm～12cm前後(0歳魚)主体。豊後水道中南部東側では、5cm～10cm前後(0歳魚)主体。宿毛湾～紀伊水道外域では、14cm未満(0歳魚)および14cm以上(1歳以上)が漁獲される。熊野灘では14cm以上(1歳以上)主体。

2. 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：伊勢湾・渥美外海では前年並。駿河湾、相模湾西部では前年を下回る。相模湾東部では前年並。

(2) 漁期：三河湾では漁獲はなく、伊勢湾・渥美外海では6月以降、駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：伊勢湾・渥美外海では14cm以下(0歳魚)主体。駿河湾、相模湾西部では、期前半は15cm～20cm前後(1歳魚～3歳魚)、期後半は12cm以下(0歳魚)主体。相模湾東部では10cm以上(1歳以上)主体。

3. 房総～三陸海域、道東海域(まき網、定置網)

(1) 来遊量：まき網では前年を下回る。定置網では前年並～上回る。

(2) 漁期・漁場：1 そうまきの漁場は、1月～5月は犬吠埼沖～三陸南部海域で形成され、6月以降は犬吠埼沖～三陸北部海域、6月下旬には道東海域でも形成される。2 そうまきの漁場は、期を通じて房総海域に形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて入網がみられる。

(3) 魚体：10cm～15cm前後(1歳魚)、14cm～17cm前後(2歳魚)、16cm～18cm前後(3歳魚)、17cm～20cm(4歳魚)。まき網では3歳以上、定置網では1歳魚、3歳魚主体。

漁況の経過(2024年7月～11月)および見通し(2025年1月～6月)についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980年代は1,000万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入

って急減し、2002 年以降 2009 年まで 10 万トン前後の低い水準で推移した。その後、比較的良好な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2020 年には 500 万トンを上回った。しかしその後、加入量は減少傾向にあり、2023 年の資源量は 426 万トンと推定された(2024 年度資源評価)。

2021 年級群(4 歳)以上は、最近 10 年(以下、近年)において高い加入量の年級群で構成されている。2024 年における 3 歳以上としての漁獲状況は前年並であった。4 歳以上の推定残存資源量は前年を上回る。

2022 年級群(3 歳魚)は、加入量が 606 億尾と推定されており、2021 年級群を下回る水準となっている。2024 年における 2 歳魚としての漁獲状況は、前年を下回った。2022 年級群の推定残存資源量は、2021 年級群の同時期を下回っている。

2023 年級群(2 歳魚)は、加入量が 351 億尾と推定されており、2022 年級群の加入水準を下回っている。2024 年における 1 歳魚としての漁獲状況は、前年を下回った。2023 年級群の推定残存資源量は、2022 年級群の同時期を下回っている。

2024 年級群(1 歳魚)は、2024 年における 0 歳魚としての漁獲状況(主に西日本海域)は、前年と同程度であった。一方で、沖合域においては、5 月～6 月の移行域幼稚魚調査(水産資源研究所)において前年を下回る CPUE(Catch Per Unit Effort: 単位努力量当たり漁獲量)であったが、2024 年 6 月～7 月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査(水産資源研究所)においては前年並の CPUE となり、2024 年 9 月～10 月の北西太平洋秋季浮魚類資源調査(水産資源研究所)の CPUE は前年を上回った。現時点では不確実であるが、近年は沖合回遊群が資源の中心であることを踏まえ、2024 年級群の加入量は前年並～上回る水準と考えられる。

2025 年級群(0 歳魚)については、現時点ではその水準を予測できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘(まき網、定置網)

北薩～熊野灘での 7 月～11 月の漁獲量は 6.1 千トンと前年同期(9.3 千トン)を下回った。豊後水道中南部東側～紀伊水道外域東部および熊野灘で前年を大きく上回る漁獲となったが、北薩～薩南海域において前年を大きく下回る漁獲となった。(漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値)
・来遊量: 北薩、薩南海域では、1 月～4 月は 1 歳魚(2024 年級群)、2 歳魚(2023 年級群)が、5 月以降は 0 歳魚(2025 年級群)が漁獲の主体となる。今期の漁獲の主体となる 1 歳魚、2 歳魚の漁獲状況から、来遊量は前年並と予測される。

日向灘では、期前半は 1 歳以上が、後半は 0 歳魚が漁獲の主体となる。今期の漁獲の主体となる 1 歳以上の漁獲量の予測値(三重県・高知県・鹿児島県の直近のまき網漁獲量に基づく)は、現時点で前年を上回っているため、期前半の来遊量は前年を上回ると予測される。ただし、0 歳魚主体に漁獲される期後半は、現時点での予測が困難である。

豊後水道南部西側では、3 月までは 1 歳魚、2 歳以上、4 月以降は 0 歳魚が漁獲の主体となる。今期の漁獲の主体となる 2024 年級群の 2024 年 7 月～11 月のまき網における漁獲状況は前年並であることから、今期の来遊量は前年並と予測される。

豊後水道中南部東側では、0 歳魚が漁獲の主体となる。2024 年 7 月～11 月の漁獲状況が前年を大きく上

回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では、0歳魚および1歳以上が漁獲される。今期の漁獲の主体となる1歳魚の漁獲状況は、まき網、定置網ともに前年を上回ったものの、依然として低水準を維持しているため、来遊量は前年並と予測される。

紀伊水道外域西部では、0歳魚が漁獲の主体となる。近年の漁獲傾向から、来遊量は前年を上回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、定置網は2016年以降、低調に推移している。また、潮岬沖での黒潮の離岸傾向が継続した場合、マイワシ漁場の形成条件は悪いと考えられる。以上より、来遊量は低調であった前年並と予測される。

熊野灘では、1歳以上が漁獲の主体となる。本海域における漁獲量は2020年から減少し続けており、今期も黒潮大蛇行の影響による来遊条件の悪化が継続することにより、産卵親魚の来遊が減少することが予測される。沿岸域の1歳魚および2歳魚については、秋季にややまとまった漁獲が見られたものの、依然として低水準であった。以上より、全体としての来遊量は低水準と予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、北薩～豊後水道南部西側では、期前半は15 cm～20 cm前後の1歳以上、期後半は7 cm～12 cm前後の0歳魚が主体となる。豊後水道中南部東側では、5 cm～10 cm前後の0歳魚が主体となる。宿毛湾～紀伊水道外域では、14 cm未満の0歳魚および14 cm以上の1歳以上が漁獲される。熊野灘では14 cm以上の1歳以上が漁獲される。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

伊勢・三河湾～相模湾での7月～11月の漁獲量は、1.8千トンと前年同期（4.8千トン）を下回った。伊勢・三河湾および駿河湾、相模湾西部では前年を下回る漁獲となった。相模湾東部では前年を上回る漁獲となった。

・来遊量：三河湾では、魚体の大型化を図るため、今期の操業は自粛されるが、伊勢湾・渥美外海では6月以降に、0歳魚（2025年級群）主体に漁獲される。近年、マシラスの来遊、加入状況が悪いため、今期の来遊量は、低水準だった前年並と予測される。

駿河湾、相模湾西部では、期前半は1歳魚～3歳魚（2024年級群～2022年級群）が主体となり、期後半は0歳魚が主体となる。今期は、南下回遊する産卵親魚が主に漁獲されることが考えられる。マイワシ太平洋系群の親魚量と静岡県1月～6月の水揚量は正の関係がある。マイワシ太平洋系群の親魚量は前年を下回ると推定されていることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

相模湾東部では、黒潮大蛇行の影響で冬から春にかけて産卵親魚が接岸しやすい状況となっていることから、今期の来遊量は前年並と予測される。

- ・漁期：伊勢湾・渥美外海は6月以降。駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、伊勢湾・渥美外海では14 cm以下の0歳魚が主体となる。駿河湾、相模湾西部では、期前半は15 cm～20 cm前後の1歳魚～3歳魚が主体となり、期後半は12 cm以下の0歳魚が主体となる。相模湾東部では10 cm以上の1歳以上が主体となる。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

道東海域のまき網漁業は、6月下旬から10月まで操業が行われ、漁獲量は20.6万トンと前年同期（25.0万トン）並であった。房総～三陸海域のまき網漁業の7月～11月の漁獲量は、1.5万トンと前年同期（0.9万トン）を上回った。房総以北の定置網等は、7月～11月の漁獲量は1.9万トンと前年同期（2.3万トン）並であった。

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）、3歳魚（2022年級群）および4歳（2021年級群）以上となる。

資源状態を基にすると、漁獲の主体となる3歳以上の来遊量は前年を下回ると考えられる。2歳魚は、加入量が前年を下回る水準であることから、来遊量は前年を下回ると考えられる。1歳魚は、現時点では不確定であるが、沖合域での調査結果から来遊量は前年並～上回ると考えられる。以上より、全体としての来遊量は、前年を下回ると予測される。ただし漁獲量は、まき網の操業状況に左右される。なお、仙台湾～三陸南部海域の定置網では海洋環境も考慮して前年並～上回る。

・漁期・漁場：1 そうまきの漁場は、1月～5月は犬吠埼沖～三陸南部海域に形成される。6月以降は犬吠埼沖～三陸北部海域、6月下旬には道東海域でも漁場が形成される。2 そうまきの漁場は、期を通じて房総海域に形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて入網がみられる。

・魚体：近年および直近の出現状況から、1歳魚は10 cm～15 cm前後、2歳魚は14 cm～17 cm前後、3歳魚は16 cm～18 cm前後、4歳以上は17 cm～20 cm前後。1 そうまきおよび2 そうまきでは、3歳以上が漁獲の主体となる。定置網では、1歳魚、3歳魚を主体に2歳魚、4歳以上も混じる。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2025年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2025年級群）、1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年を下回る。日向灘では前年並。豊後水道南部西側では前年を下回る。豊後水道東側では前年を上回る。宿毛湾・土佐湾では前年を下回る。紀伊水道外域西部では前年を上回る。紀伊水道外域東部ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：12 cm未満の0歳魚、1歳魚が主体。

2. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘では前年並～上回る。相模湾では前年並。三河湾では漁獲はなく、伊勢湾、渥美外海では予測が困難。

(2) 漁期・漁場：熊野灘、相模湾では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：8 cm～12 cmの1歳魚が主体。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総海域では前年を上回る。三陸南部海域～仙台湾では前年並～下回る。常磐海域、三陸北部海域ではまとまった漁獲がない。道東海域では主な漁獲対象にならない。

(2) 漁期・漁場：房総海域では2そうまきにより期を通じて漁獲される。三陸南部海域～仙台湾では定置網により期を通じて漁獲される。1そうまきの主な漁獲対象にはならない。

(3) 魚体：9 cm～12 cmの1歳魚を主体に、10 cm～13 cmの2歳魚が漁獲される。

漁況の経過（2024年7月～11月）および見通し（2025年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、2002年の291万トンピークに減少傾向に転じ、2018年に9.3万トンの最小値となった後、増加に転じて2023年は26.2万トンと推定された（2024年度資源評価）。資源動向は親魚量の最近5カ年の推移から増加傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく、資源状態に応じて黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2024年度資源評価に基づくと、2023年級群（2歳魚）の加入量は300億尾と推定され、2022年級群の加入量を上回った。2024年における1歳魚としての漁獲状況は前年を上回った。これらのことから、2023年級群の残存資源量は、2022年級群を上回る水準であると推測される。

2024年級群（1歳魚）は、シラスや0歳魚として主産卵場である東海海域を中心に7月以降に漁獲され、2024年のその漁獲量は前年並であった。水産資源研究所が実施した沖合域の調査船調査では、2024

年6月、7月における北西太平洋北上期浮魚類資源調査（以降、北上期調査）の推定0歳魚のCPUE（全測点の平均CPUEで速報値。以下同様）は前年を上回ったが低水準であった。このことから、2024年級群は2023年級群と同程度の加入量であり、残存資源量も同程度の水準であると推測される。

2025年級群（0歳魚）は、現時点でその水準を予測することは難しい。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

・来遊量：北薩～薩南海域では、近年カタクチイワシの漁獲量は減少傾向にあり、2024年7月～11月の漁獲量も前年を下回って推移していることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

日向灘では、近年は沿岸発生群が漁獲の主体となっている。当海域と周辺海域における2024年秋季のシラス漁獲量は低調な前年並であったことから、来遊量は前年並と予測される。中型まき網による漁獲が本格化する6月の来遊量は現時点では予測が困難である。

豊後水道南部西側では、0歳魚（2025年級群）と1歳魚（2024年級群）が漁獲の主体となる。0歳魚の来遊量は現段階では不明だが、2024年級群が水揚げの主体であった2024年7月～11月のまき網水揚量が前年を下回ったことから、来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道東側では、1歳魚が漁獲の主体となる。2024年5月頃から漁獲対象となるカタクチイワシのシラス水揚量が前年を大きく上回ったことから、来遊量は前年を上回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では、期を通じて0歳魚と1歳以上が漁獲の対象となる。1月～6月の宿毛湾中型まき網水揚量と前年10月、11月の宿毛湾中型まき網及び日向灘まき網の水揚量合計との間には正の関係が見られる。この関係式からの今期の予測値が前年同期の実測値を下回ることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、近年の漁獲傾向から、来遊量は前年を上回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、未成魚・成魚は主な漁獲対象ではない。

- ・漁期：期を通じて漁獲される。
- ・魚体：12 cm未満の0歳魚、1歳魚が主体。

(2) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：熊野灘では、冬季に来遊する魚群は前年夏秋季の漁獲対象とは異なり、黒潮親潮移行域から大規模回遊を行う群と考えられ、漁獲動向も前年夏秋季とは連動しない。2024年の北上期調査によると、当時の推定0歳魚（2024年級群）のCPUEは依然として低水準であった。一方で、三陸海域では2024年7月～11月に好漁となっていることから、南下群の来遊量は前年を上回ると予測されている。以上から、来遊量は前年並～上回ると予測される。なお、2023年2月のようにサバ類やマイワシの産卵回遊群の来遊が無く、カタクチイワシの産卵回遊群の来遊があれば漁業の主対象種となり、ややまとまって漁獲される可能性がある。

三河湾では資源保護のため操業は自粛される。伊勢湾、渥美外海では、1月～3月に1歳魚（2024年級群）主体の漁場が散発的に形成され、伊勢湾では、6月以降に0歳魚（2025年級群）主体の漁場が形成され

る。資源評価では、資源量は低水準とされ、来遊量は少ないと推察されるが、現時点では来遊量の予測は困難である。

相模湾西部では、近年は定置網で僅かに漁獲される程度である。漁獲対象となる1歳魚の資源水準は、前年に引き続き低水準と推測されることから、来遊量は低調であった前年並と予測される。

相模湾東部では、黒潮A型流路が継続している2018年以降、主要定置網の漁獲量は数トンのレベルに留まっている（秋季に一時的にB型となった2020年を除く）。JCOPE2Mによる黒潮長期予測（2024年12月4日発表）によると、黒潮大蛇行は少なくとも2025年2月まで継続すると予測されており、近年同様の不漁傾向が継続すると考えられる。これらのことから、来遊量は低調であった前年並と予測される。

- ・漁期：熊野灘、相模湾では期を通じて漁獲される。
- ・魚体：8 cm～12 cmの1歳魚が主体。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：房総海域では、1歳魚（2024年級群）主体に2歳（2023年級群）以上が混じる。1歳魚は、前年秋季から継続して漁獲される群（以降、滞留群）と、冬季以降に三陸海域以北から南下する群（以降、南下群）が漁獲対象になる。滞留群は、2024年10月、11月の千葉県主要漁港における0歳魚の漁獲量が前年を下回ったことから、前年を下回る低水準の来遊が推測される。南下群は、沿岸域の水温低下とともに来遊すると考えられ、FRA-ROMS IIによると2024年12月下旬には三陸海域～房総海域における沿岸域の水温が前年同期よりも低くなると予測されていることに加え、三陸海域では0歳魚と思われる群を主体とした2024年秋季以降の漁獲量が前年同期を上回っていることから、前年を上回る水準の来遊が推測される。2024年秋季において南下群の漁獲量は滞留群の漁獲量を上回ったと見込まれるため、1歳魚の来遊主体は南下群であると考えられる。2歳以上は、2024年12月上旬時点で三陸海域以北における漁獲がほとんど無いため、前年並の低水準と考えられる。全体としては、1歳魚の来遊量を反映して、前年を上回ると予測される。

常磐海域では、冬季から春季に漁獲されるカタクチイワシは、体長12 cm以上の大型成魚（2歳以上）と体長9 cm～11 cmの小型成魚（1歳魚）で構成される。カタクチイワシの沖合回遊群の資源量は北部まき網による水揚量からも増加傾向にあると考えられるが、1そうまきは周年、サバ類やマイワシを漁獲対象にするため、まとまった漁獲はない。

三陸南部海域～仙台湾では、釧路水産試験場が2024年9月、10月に道東沖で行った漁獲調査においてカタクチイワシがまとまって採集されていることから、1月に1歳魚を主体とした沖合回遊群が本格的に南下し、前年並～上回る水準の来遊が推測される。2024年1月～6月は暖水波及により当海域が高水温となったことから期を通じて漁獲が継続したが、2025年2月以降には沿岸域の水温が前年同期よりも低くなると予測されている（FRA-ROMS IIによる予測）。2月～4月に漁獲対象となる群は1月までに南下してきた群が滞留したものであり、低水温によってさらに南下すると推察されることから、前年を下回る水準の来遊が推測される。5月以降は北上群の前年並の来遊が考えられる。総じて、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

道東海域では、2021年以降の釧路水産試験場の調査船調査結果から、当海域におけるカタクチイワシの来遊量が増加傾向にあると考えられるため、予測期間中に当海域に来遊する可能性がある。しかし、予測期

間中に操業する沿岸漁業やまき網漁業では、マイワシを中心とした漁獲が行われると考えられるため、本種を対象とした漁獲が行われる可能性は低い。このことから、来遊量の予測は困難である。

- ・漁期・漁場：房総海域では期を通じて2そうまきにより漁獲される。三陸南部海域～仙台湾では期を通じて定置網により漁獲される。資源量が多い年には、1そうまきの漁場が主として常磐～房総海域に形成されていたが、近年は1そうまきの主たる漁獲対象になっていない。

- ・魚体：9 cm～12 cmの1歳魚を主体に、10 cm～13 cmの2歳魚が漁獲される。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2025年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚（2025年級群）、1歳（2024年級群）以上。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

(1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年並。日向灘および豊後水道では前年を下回る。宿毛湾・土佐湾では前年並～上回る。紀伊水道外域では前年並。熊野灘では前年並～上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：前半は1歳魚（15 cm～20 cm）が主体であり、後半に0歳魚（10 cm以下）が加入する。

漁況経過（2024年7月～11月）および見通し（2025年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

太平洋および瀬戸内海における漁獲量（農林統計）は、2015年に48.9千トンと過去最高となったが、2016年以降から減少傾向に転じ、2020年には23.9千トンとなった。2021年に39.3千トンと一時的に増加したが、2022年に22.0千トンとなり、2023年の漁獲量暫定値は27.6千トンであった。余剰生産モデルにより算出された資源量指標値（平均値を1とする相対値）は、1979年以降緩やかに増加して1998年に0.95を示し、その後減少して2002年に0.75となった。2003年以降は再び増加し、2015年に過去最高となる1.78を示した。2016年以降は減少傾向が継続しており、2023年における相対値は0.94となった。これらのことから、令和6(2024)年度資源評価において、減少傾向にあると判断されている。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

本予測期間（2025年1月～6月）は、前半は1歳魚（2024年級群）主体の漁況になると推測されるため、2024年後半期（7月～11月）の漁況等から、1歳魚の来遊量を予測した。後半には0歳魚（2025年級群）が加入するが、現時点での予測は困難である。

予報対象海域である鹿児島県～三重県における2024年1月～11月の主要港漁獲量は21.7千トンと前年同期（26.1千トン）並であった。予測対象海域の主要港における前半期（1月～6月）漁獲量と後半期（8月～12月）漁獲量には正の関係がある。後半期（7月～11月）漁獲量と翌年前半期（1月～6月）漁獲量にも、弱いながらも統計的に有意な正の関係がある。2000年～2023年の後半期（7月～11月）漁獲量と翌年前半期（1月～6月）漁獲量との関係を用いて、2024年7月～11月の漁獲量（15.5千トン）から予測した2025年前半期（1月～6月）の漁獲量は7.3千トンであった。これは2024年同期漁獲量（6.2千トン）の119%に相当する。この関係に基づくと、2025年前半期（1月～6月）の来遊量は前年並と予測される。

北薩～薩南海域では、1月～4月の漁獲の主体は1歳以上（2024年級群以上、15 cm～20 cm）で、5月～6月の主体は0歳魚（2025年級群、7 cm～10 cm）となる。1月～4月に漁獲の主体となる1歳以上（2024年級群以上）の漁模様から、来遊量は前年並と予測される。

日向灘では、1月～5月は1歳以上（2024年級群以上、15 cm～20 cm以上）、6月以降は0歳魚（2025年級群）が主体となる。1月～5月に主体となる1歳以上（2024年級群以上）については、指標値（宮崎県・高知県・大分県のまき網漁獲量に基づく）を基に漁況を判断している。現時点における指標値は前年の宮崎県の漁獲量を下回っていることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、1月～3月は1歳魚（2024年級群、15 cm～20 cm）、4月～6月は0歳魚（2025年級群、10 cm前後）が主体となる。2024年7月～11月の漁獲の主体は2024年級群であり、2025年はこれらの個体が1歳魚となり漁獲される可能性がある。2024年7月～11月のまき網漁獲量が前年を下回ったため、来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部東側では、主漁期となる4月～6月に0歳魚（2025年級群、5 cm～10 cm）が漁獲の主体となる。これらの個体の産卵親魚になり得る2024年7月～11月の0歳魚（2024年級群）の漁獲量が前年同期を下回っていることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では、宿毛湾中型まき網が漁獲の中心である。宿毛湾中型まき網における1月～6月の漁獲量と7月～12月期の漁獲量には有意な正の関係がみられ、関係式から予測される2024年1月～6月の漁獲量は1.8千トンと前年（1.0千トン）より多いことから、来遊量は前年並～上回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、近年の漁獲傾向から、来遊量は前年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、棒受網による漁獲量は2016年以降減少している。熊野灘南部における定置網および潮岬周辺における棒受網による漁獲量は、総じて減少傾向である。また、黒潮が潮岬で離岸のまま推移した場合、漁場形成条件は悪いと考えられる。これらのことから、来遊量は前年並と予測される。

熊野灘では明け1歳魚（2024年級群、15 cm～20 cm）および2歳以上（2023年級群以上、20 cm以上）が主体となる。近年の熊野灘では冬春季の成魚は期間、量ともに減少傾向が続いているが、2歳以上の来遊量は、7月～9月に20 cm以上の大型魚がまとまっていたため、前年を上回ると予測される。また、1歳魚の来遊量は、7月～11月の漁況が前年同期並であるため、前年並と判断される。以上から、来遊量は前年並～上回ると予測される。なお、熊野灘ではサバ類など他に優先的に獲るものがあれば積極的に漁獲されないため、漁獲が来遊を反映しない可能性もある。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2025年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2025年級群）、1歳魚（2024年級群）、
2歳魚（2023年級群）、3歳（2022年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年を下回る。日向灘では前年を上回る。豊後水道南部西側では前年を下回る。豊後水道東側では前年並～上回る。宿毛湾・土佐湾では前年を上回る。

(2) 魚体：北薩～薩南海域では1歳魚、2歳魚主体、日向灘、豊後水道南部西側では1歳魚が主体、豊後水道東側では0歳魚が主体、宿毛湾・土佐湾では0歳魚、1歳魚が主体。0歳魚は14 cm以下、1歳魚は14 cm～20 cm、2歳以上は20 cm以上。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：紀伊水道外域西部では前年並～下回る。紀伊水道外域東部では前年を上回る。熊野灘では前年を上回る。

(2) 魚体：紀伊水道外域西部では0歳魚主体、紀伊水道外域東部では1歳魚～3歳魚主体、熊野灘では1歳魚主体に0歳魚および2歳以上が混じる。0歳魚は12 cm以下、1歳魚は12 cm～21 cm、2歳以上は21 cm以上。

3. 相模湾（定置網）

(1) 来遊量：伊豆東岸では前年を上回る。西湘地区では前年を下回る。

(2) 魚体：主体となる1歳魚は14 cm～22 cm。

漁況の経過（2024年7月～11月）および見通し（2025年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが、1997年以降は減少傾向に転じ、2015年には4.4万トンまで減少した。その後は横ばい傾向を示している。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降2.8億尾～7.1億尾と低い水準で推移している。令和6年度（2024年度）資源評価において、2023年の資源量は4.6万トン、親魚量は1.8万トンと推定された。

2022年級群（3歳魚）の加入量は4.3億尾と推定され、2024年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ない。

2023年級群（2歳魚）の加入量は5.7億尾と推定された。2024年前半の漁獲の主体となったが、2024年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ないと考えられる。

2024年級群（1歳魚）は、いずれの海域でも漁獲対象になる。現状での各県地先の加入量の指標値は、宮崎県南部定置網アジ仔CPUE（4月～6月）、宇和島港まき網ゼンゴCPUE（4月～11月）、宿毛湾まき網ゼンゴCPUE（4月～11月）、伊勢湾小型底びき網（まめ板）当歳魚漁獲量（4月～11月）では前年を上回っているが、串本棒受網当歳魚漁獲量（5月～6月）、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量（4月～11月）、千葉県定置網当歳魚漁獲量（10月～11月）は前年を下回っている。4月～11月の指標値の相乗平均は2023年級群を上回るが、0歳魚主要港漁獲尾数は2023年級群を下回るので、2024年級群の加入量については現時点での推定は難しい。

2025年級群（0歳魚）は期後半から漁獲されると考えられるが、現時点での予測は困難である。

2. 来遊量、漁期・漁場

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに前期の漁況に基づき予測した。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚（2025年級群）：14 cm以下、1歳魚（2024年級群）：15 cm～20 cm、2歳魚（2023年級群）：21 cm～24 cm、3歳（2022年級群）以上：25 cm以上。3歳以上の年齢に対応した体長区分は現状では困難である。なお近年の報告によると、相模湾以東では20 cm台に3歳～10歳以上の高齢魚がみられることが明らかになってきている。

(1) 北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、1歳魚、2歳魚（2024年級群、2023年級群）が漁獲の主体となる。1月～6月の漁獲量は、前年11月の漁獲量と正の関係が認められることから、今期の漁獲量は前年を下回ると予測される。

日向灘では、1歳魚が漁獲の主体となる。日向灘のまき網は、前年7月～12月漁獲量と高知県（宿毛湾）前年7月～11月まき網漁獲量の相乗平均値により漁獲動向を判断している。11月までの予測値が前年の宮崎県の漁獲量を上回ることから、日向灘における2025年1月～6月の漁獲量は前年を上回ると予測される。

豊後水道南部西側では、1歳魚が漁獲の主体となる。2025年は2024年7月～11月に水揚げされた2024年級群（0歳魚）が1歳魚となり漁獲される可能性がある。2024年1月～4月のマアジ漁獲量は2023年1月～4月と比較して好調であったが、5月以降は低調に推移しており、2024年級群が水揚げの主体であった2024年7月～11月のまき網水揚量が前年を下回ったことから、来遊水準は前年を下回ると予測される。

豊後水道東側では、例年だと5月ごろから0歳魚の漁獲が始まる。0歳魚の来遊水準の予測は難しいが、太平洋系群の親魚量は減少傾向にあるが、来遊してくるとされる東シナ海の親魚量は横ばいであり、2024年7月～11月の水揚量が愛媛県の各海域とも前年を大きく上回ることから、0歳魚（2025年級群）の来遊水準は前年並～上回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では、0歳魚と1歳魚が主体となる。中型まき網で2025年に1歳魚となる2024年級群の来遊が前年より多いことから、来遊量は前年を上回ると予測される。

(2) 紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、近年の漁獲傾向から前年並～下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、1歳魚～3歳魚（2024年級群～2022年級群）が漁獲の主体となる。1990年～2024年の1月～6月の漁獲量は、前年7月～11月の漁獲量と正の関係が認められる。その関係式から、前年を上回ると予測される。

熊野灘では、1歳魚（14 cm～22 cm）が主体で、0歳魚（2025年級群、5 cm～12 cm）および2歳以上（22 cm以上）も混じる。2024年7月～11月の漁況から、今期の漁獲主体となる1歳魚は前年並～上回ると予測される。また、まき網で漁獲された1歳魚（2023年級群）の漁況も前年を上回っていることから、今期の2歳以上も前年を上回ると予測される。以上総じて、来遊量は前年を上回ると予測される。

(3) 相模湾

伊豆東岸では、1歳魚（2024年級群）が漁獲の主体となる。2007年～2023年の4月～11月の0歳魚の推定漁獲尾数と翌年1月～6月の1歳以上の推定漁獲尾数との間には正の関係が認められ、この関係式に2024年4月～11月の0歳魚推定漁獲尾数を代入すると、2025年1月～6月の1歳以上の漁獲尾数は前年を上回ると予測される。

西湘地区では、4月～6月を中心に1歳魚が漁獲されるが、2023年に0歳魚が豊漁であったことより、2歳魚（2023年級群）も加わることが予測される。主体となる1歳魚は、2024年の0歳魚漁獲量が2023年を下回ったので、今期の漁獲量は前年を下回ると予測される。

(4) 房総～三陸海域等の漁獲情報

房総～鹿島灘海域における北部まき網の2024年7月～11月の漁獲量は121トン（TACシステム）と、好調であった前年同期2,639トンを大きく下回った。

仙台湾～三陸海域等では、宮城県の2024年7月～11月の漁獲量は1,016トンで前年を上回った。岩手県の2024年7月～11月の定置網による漁獲量は249トンで前年を上回った。青森県では2024年7月～11月の八戸の漁獲量は11トンで前年を上回り、平館の定置網による漁獲量は4トンで前年を下回った。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2025年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域

対象漁業：まき網、定置網、底曳網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）、3歳魚（2022年級群）、
4歳魚（2021年級群）、5歳魚（2020年級群）、6歳（2019年級群）以上。
年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）

(1) 来遊量：マサバは豊後水道南部では前年を下回る。ゴマサバは北薩～薩南海域では前年を上回り、日向灘では低調であった前年を上回り、豊後水道南部では混獲される程度、土佐湾では前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは豊後水道南部西側では25 cm～36 cm（1歳以上）主体、豊後水道中南部東側では10 cm～30 cm（0歳魚、1歳魚）主体。ゴマサバは北薩～薩南海域では25 cm～36 cm（1歳魚～3歳魚）主体、日向灘では30 cm～38 cm（3歳以上）主体、豊後水道南部では10 cm～30 cm（0歳魚、1歳魚）主体、土佐湾では31 cm～38 cm（3歳魚～5歳魚）主体。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは前年並、ゴマサバは混獲される程度。マサバを主体とするサバ類全体としては前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは24 cm～37 cm（1歳魚～4歳魚）主体、ゴマサバは27 cm～35 cm（1歳魚～4歳魚）主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバ、ゴマサバともに低水準。サバ類全体としては低水準。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは25 cm～39 cm（2歳以上）主体に漁獲される。ゴマサバは30 cm～40 cm（2歳以上）主体に漁獲される。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

(1) 来遊量：マサバ3歳魚は前年並。4歳魚は前年並。5歳魚は前年を上回る。6歳以上は前年を下回る。マサバ全体としては前年を下回る。ゴマサバは低調であった前年並～下回る。サバ類全体としては前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：マサバ、ゴマサバともに期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となる。

(3) 魚体：マサバは27 cm～30 cm（3歳魚）主体に、31 cm以上（4歳以上）も漁獲される。ゴマサバは32 cm以上（3歳以上）主体に漁獲される。

5. 犬吠埼沖～三陸海域（まき網、定置網、底曳網）

(1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年並。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年並。4歳魚は前年並。5歳魚は前年を上回る。6歳以上は前年を下回る。マサバはまき網では極めて低調であった前年を上回り、定置網、底曳網では前年並。ゴマサバはまき網では混獲される程度、定置網では一時的にまとまった漁獲がみられる。サバ類全体としては低調であった前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：まき網では期を通じて犬吠埼沖～常磐南部海域が主漁場となり、期後半には三陸南部海域にも漁場が形成される。三陸海域の定置網、底曳網ではマサバは期を通じて漁獲され、三陸海域の定置網ではゴマサバは一時的に漁獲される。

(3) 魚体：マサバは、期を通じて21 cm～36 cm（2歳魚、3歳魚）主体に、1月、2月および4月以降は28 cm～37 cm（4歳以上）も漁獲される。

漁況の経過（2024年7月～11月）および見通し（2025年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990年代～2000年代前半に極めて低い水準にあったが、2013年の高い加入量により2013年に急増した。さらに2018年の高い加入量により資源量は2018年にピークを迎えたが、その後は減少傾向を示している。2013年級群の発生以降、成長および成熟の遅れがみられている。

2019年級群（6歳魚）は、2024年12月時点の資源評価（状態空間資源評価モデル（SAM）の暫定値）による推定加入量が53億尾と近年（2014年～2023年）の平均（77億尾）を下回る水準である。

2020年級群（5歳魚）は、推定加入量が83億尾と近年の平均程度の水準である。

2021年級群（4歳魚）は、推定加入量が88億尾と近年の平均程度の水準である。

2022年級群（3歳魚）は、推定加入量が72億尾と近年の平均程度の水準である。

2023年級群（2歳魚）は、推定加入量が35億尾と近年の平均を下回る水準である。

2024年級群（1歳魚）の加入量は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所、6月～7月）および再生産関係から、近年の平均を下回る水準と推定されている。

2) ゴマサバ

資源量は2004年～2011年に高い水準にあったが、2011年以降、減少傾向を示し、2020年の資源量は、資源量を推定している1995年以降で最低水準となった。2021年以降は緩やかな増加傾向を示しているが、依然として低水準にある。

2020年級群（5歳魚）は、2024年12月時点の資源評価（コホート解析の暫定値）による推定加入量が3.9億尾と近年の平均（5.1億尾）を下回る水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2021年級群（4歳魚）は、推定加入量が4.0億尾と近年の平均を下回る水準である。

2022年級群（3歳魚）は、推定加入量が4.2億尾と近年の平均程度の水準である。

2023年級群（2歳魚）は、推定加入量が9.0億尾と近年の平均を上回る水準であるが、その不確実性は高い。

2024年級群（1歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均を下回る水準と推定されている。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態を基にすると、1歳魚（2024年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年並となる。2歳魚（2023年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。3歳魚（2022年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年並となる。4歳魚（2021年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年並となる。5歳魚（2020年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を上回る。6歳魚（2019年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。また、常磐沖の黒潮続流が北偏していることから魚群の南下が遅れており、1月以降も北偏が継続することが予測されている。これらのことを考慮すると、マサバの来遊量は、犬吠埼以北のまき網ではマイワシの漁獲状況にもよるが、極めて低調であった前年を上回り、三陸海域の定置網、底曳網では前年並、伊豆諸島周辺海域では前年を下回り、紀伊水道外域では前年並、豊後水道南部では前年を下回り、熊野灘では低

水準となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

犬吠埼以北海域でのまき網漁業では、7月～9月は八戸沖および鹿島灘～犬吠埼沖で漁獲がみられたが、漁模様は低調に推移した。10月、11月は八戸沖～犬吠埼沖でややまとまった漁獲がみられた。道東沖では漁獲されなかった。7月～11月の漁獲量は、犬吠埼以北海域におけるまき網では1.3万トンと前年同期(1.1万トン)を上回り、千葉県以北の定置網・底曳網等では1.2万トンと前年同期(2.3万トン)を下回り、伊豆諸島以西の海域では3.3千トンと前年同期(2.6千トン)を上回った。(漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値)

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は以下のとおり。犬吠埼以北海域のまき網では、期を通じて犬吠埼沖～常磐南部海域が主漁場となり、期後半には三陸南部海域にも漁場が形成される。期を通じて2歳魚、3歳魚が主体に漁獲され、1月、2月および4月以降は4歳以上も漁獲される。三陸海域の定置網、底曳網では期を通じて漁獲される。伊豆諸島周辺海域では、3歳魚が主体に4歳以上も漁獲される。漁場形成は黒潮流路変動に強く影響される。黒潮流路はA型で推移し、銭洲周辺、三宅島付近を流れると予測されており、期を通じて伊豆諸島北部海域に漁場が形成される。熊野灘以西では昨年同様にマサバ主体の漁場形成も一時的にみられる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚(2024年級群):27cm以下、2歳魚(2023年級群):21cm～32cm、3歳魚(2022年級群):24cm～36cm、4歳魚(2021年級群):27cm～36cm、5歳魚(2020年級群):28cm～37cm、6歳(2019年級群)以上:31cm以上。(各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている)

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態を基にすると、1歳魚(2024年級群)は、加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。2歳魚(2023年級群)は、加入量が近年の平均を上回る水準であり、来遊量は前年を上回る。3歳魚(2022年級群)は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年並となる。4歳(2021年級群)以上は残存資源量が少なくなっている。ゴマサバの来遊量は、北薩～薩南海域では前年を上回り、日向灘では低調であった前年を上回り、豊後水道南部では混獲される程度、土佐湾では前年並、紀伊水道外域では混獲される程度、熊野灘では低水準、伊豆諸島周辺海域では低調であった前年並～下回り、犬吠埼以北のまき網では混獲される程度、三陸海域の定置網では一時的にまとまった漁獲がみられる。海域全体の来遊量としては低水準となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

7月～11月の漁獲量は、北薩～紀伊水道外域では3.1千トンと前年同期(1.5千トン)を上回り、熊野灘では0.7千トンと前年同期(1.2千トン)を下回り、伊豆諸島周辺海域では1.2千トンと前年同期(2.7千トン)を下回り、犬吠埼以北海域のまき網では1.3千トンと前年同期(0.5千トン)を上回り、千葉県以北の定置網・底曳網等では6.3千トンと前年同期(7.3千トン)並であった。

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は、北薩～薩南海域では1歳魚～3歳魚主体、日向灘では3歳以上主体、豊後水道南部では0歳魚、1歳魚主体、土佐湾では3歳魚～5歳魚主体、紀伊水道外域では1歳魚～4歳魚主体、熊野灘では2歳以上主体に、期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では3歳以上主体に、期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚(2024年級群):30cm以下、2歳魚(2023年級群):24cm～33cm、3歳魚(2022年級群):28cm～37cm、4歳魚(2021年級群):33cm～38cm、5歳(2020年級群)以上:34cm以上。(各年級群の体

長の範囲は広く重なり合っている)

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
宮城県水産技術総合センター	高知県水産試験場
福島県水産海洋研究センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
茨城県水産試験場	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
千葉県水産総合研究センター	宮崎県水産試験場
東京都島しょ農林水産総合センター	鹿児島県水産技術開発センター
神奈川県水産技術センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
静岡県水産・海洋技術研究所	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	
三重県水産研究所	